



## 答えはすべて自分の中にある

株式会社フジタ 代表取締役  
FACTORY ART MUSEUM TOYAMA 館長  
梶川 貴子

私は小さいころから言葉も少なく、勉強も大嫌い、スポーツはいたって普通、何かに熱中するというようなこともなく、ボーッとした子供でした。なので、このような教育時評に執筆をさせていただくのは、大変恐縮であります。

振り返ってみると今だからわかることが、多々あることに気付かされます。若い年代は無知のゆえ悩みを抱えやすい年代だと思います。もっと早く知っていれば良かった、と思うことがたくさんありました。ここで少しだけお伝えできたらと思います。

私が生まれた年は、昭和39年の東京オリンピックの年で、日本経済がこれから急成長していく頃でとても活気のある時代だったと思います。また、就職した時代はバブル経済の真ただ中の好景気でした。日本が未来永劫豊かになると信じ浮かれていた時代に大人になりました。

ただし、まだまだ男尊女卑の傾向が根強く、昭和9年生まれの子は『女に教育はいらない』とまで言っていました。今思えばその言葉をうのみにし、従うしかなかった自分をとても反省します。ここ最近の『多様性』とか、『ダイバーシティ』とか、『マイノリティ』という言葉がその時代にあったなら、もっとやりたいことをやれていたと思います。

### 好奇心というエネルギー

今思えば私は小さなころから好奇心が旺盛な子供だったと思います。「あの川の先には何があるのだろう?」「宇宙の果てってどんな世界だろう?」と妄想することが日常で、小さいころ自宅近くの川沿いを一人で歩いていき、『暗くなっても帰ってこない』と家族が大騒ぎしていた思い出があります。帰ったらこっぴどく叱られました…。

好奇心とは新しいことや希少性に興味がわき、見たい、知りたい、行ってみたい、という衝動に駆られるのです。それは今も同じで、聞いたことがない言葉や、新しいシステムや、最新の通信機器など見たら思わず知りたくなります。それが結果的には、今の仕事においてとても役に立っているのではないかと思います。他人より新しいことを先にキャッチして試してみることが、モチベーションの糧になっているのは事実です。

### マイノリティ (社会的少数者)

この言葉を初めて聞いたときは、とてもうれしくなったのをよく覚えています。まさしく『これは私のことだ!』と感じたからです。

「人と同じだとつまらない」「なぜ一緒に行動しないといけないのか?」「なぜ他人の評価や世間体でいちいち右往左往されないといけないのか?」などを考えても考えても答えが出てこなくて、『なぜなぜなぜ…』がずっと頭の中をぐるぐるしていた若い頃。マイノリティという言葉を知っただけで、ずいぶんホッとした気持ちになりました。今の時代でしたら、これが個性と言い切れると思いますが、30年前の時代は人と同じ行動、人と同じ人生を要求された時代でした。またそれが『常識』という刷り込みが強かったと思います。

その反動でしょうか、2017年には工場の一角をリノベーションをして、町工場ミュージアムを作ってしまった。

### 他人の苦言こそ宝言

学校しかり、会社しかり、町内しかり、他人と関わることを避けて通ることはできません。無人島で一人でサバイバル人生を選ぶなら別ですが・・・。

学校で楽しく盛り上がっている最中に、冷や水を差す教師がいるかもしれません。会社で苦手な上司や嫌味ばかりを言う同僚がいるかもしれません。目標にしていたことを達成して高揚している横で、「調子に乗っているんじゃない」という仲間がいるかもしれません。

これって実は大事なことなんです。他人の苦言こそ宝言です。嫌味であろうが、いじわるの発言であろうが、きちんと聞いてできれば「ありがとう」と言えるくらいの懐が必要です。

誰にもなにも言われなくなってしまうたら、手遅れです。褒めてくれる友人よりも苦言を申す人のほうが実は必要な人だったりします。でもそれがわかるのは時間が経ってからだったり、縁が切れてからだったりします。他人の苦言こそ大事に聞こう、と自分に言い聞かせています。

### 幸せの青い鳥はいないと気付いたら

日本はとても豊かな国です。物質的な欲求は満たされている国といっても過言ではないでしょう。それでもなにか物足りなさを感じる今の世の中です。

よくある話で、『白馬に乗った王子がやってくる』『幸せの青い鳥を探しに行く』など耳にしますが、最終的に『幸せの形』をしたものは向こうからのこのこ歩いてこないと腑に落ちたときから、人生がとても楽しくなりました。

『すべての答えは自分の中に潜んでいます。』自分がやりたいことは何か？自分が楽しいと感じることは何か？、と自問自答を繰り返さないとなかなか気付くことはできません。たとえ、気付くことができてもそれが60歳であろうが、80歳であろうが、遅すぎるということはないとも言えます。十人十色、自分の生き方を決めてコーディネートできるのは、まさしく自分自身。自分の内なる声を聞いて、行動に起こしてみたら、とても豊かな時間を過ごせると確信した50代です。残された人生も、妄想して、行動して、経験を積み重ね、自分が喜べる時間作りを続けていきたいと思えます。



第3回くだらないものグランプリ 優勝

『LOVE LOVEメリケンサック』

人と人との距離が遠ざかる中、誰とでも恋人つなぎになってしまう！社員の発想力と技術力が詰まった作品



「筋肉系のYouTuberがやってきた！」  
ファクトリーアートミュージアムトヤマの前で